

作 編 曲 法		担当教員	かわ の ひさ とし 河 野 久 寿
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

作曲・編曲において必要な技法の基礎を学ぶ。全体を 3 部に分け、第 1 部（1 回から 5 回まで）では、既成の作品を二部合唱から混声四部合唱までの合唱曲に編曲する方法、第 2 部（第 6 回から第 10 回まで）では、2 小節程度のモチーフを、二部形式、三部形式のピアノ作品に展開する方法、第 3 部では、テキストに基づいた旋律創作の方法について解説する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 二部合唱①
- 第 2 回 二部合唱②
- 第 3 回 同声三部合唱①
- 第 4 回 混声四部合唱①
- 第 5 回 混声四部合唱②
- 第 6 回 モチーフの展開
- 第 7 回 二部形式
- 第 8 回 三部形式①
- 第 9 回 三部形式②
- 第 10 回 三部形式③
- 第 11 回 ソング・ライティング①（童謡）
- 第 12 回 ソング・ライティング②（童謡）
- 第 13 回 ソング・ライティング③（歌謡曲）
- 第 14 回 ソング・ライティング④（歌謡曲）
- 第 15 回 ソング・ライティング⑤（オリジナル）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
授業毎における課題、制作作品にて評価する。

[4] 教 材

授業担当教員が適宜準備する。

[5] 参考図書

横山昭八『伴奏と合唱・合奏編曲にすぐ役立つ 誰にでもできる編曲入門』（音楽之友社 2003）
篠田元一著『実践コード・ワーク理論編』（リットーミュージック 2005）
篠田元一著『実践コード・ワーク応用編』（リットーミュージック 2005）
岩間 稔『ピアノ即興演奏法（改訂版）』（ヤマハ音楽振興会 1990）

応用和声		担当教員	かわのひさとし 河野久寿
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

和声学において習得した知識と実技を基に、より複雑で実際的な和声技法を習得する。四声体の分野では、ドミナント定型および終止定型、内部変換S和音の連用、フリギア終止、変終止などを用いた課題を実施する。和音分析の分野では、借用和音、上方変位、反復進行、偶成和音について学ぶ。伴奏付けの分野では、副V(7)、代理コード、反復進行、テンションなどを用いて、更に高度なテクニックを学ぶ。

[2] 授業の計画

	四声体	和音分析	伴奏付け
第1回	ドミナント定型、副V(7)の和音	副V(7)の和音	
第2回	ドミナント定型、準固有和音	副V(7)の和音	
第3回	終止定型、準固有和音	副V(7)の和音	
第4回	終止定型、ドッペルドミナントの下方変位	音度記号未記入の課題	
第5回	終止定型、ナポリのII・ドリアのIV	音度記号未記入の課題	
第6回	確認小テスト、まとめ		
第7回	内部変換、上方変位	副三和音	
第8回	S和音の連用、上方変位	副三和音	
第9回～第10回	S和音の連用	反復進行、反復進行	
第11回	確認小テスト		
第12回～第13回	D定型の補足	偶成和音、テンション	
第14回～第15回	終止の補足	応用課題、副V(7)の応用	

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。

試験：78点、確認小テスト：10点（5点×2回）、宿題：12点（1点×12回）。

[4] 教材

授業担当教員が適宜準備する。

[5] 参考図書

島岡 譲他『総合和声—実技・分析・原理（音楽之友社 1998）

篠田元一著『実践コード・ワーク理論編』（リットーミュージック 2005）

島岡 譲『和声と楽式のアナリゼ ～バイエルからソナタアルバムまで～』

（音楽之友社 1964）

日本伝統音楽演習		担当教員	なが た ひで こ 永 田 秀 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

日本人に古来より伝承されてきた日本音楽の歴史的流れを踏まえながら、その基礎理論を理解し、邦楽における伝統的歌唱法と和楽器の演奏法を実際に体験して学んでゆく。同時に、日本伝統音楽の古典から現代に至るまでの芸術作品の数々を鑑賞することにより、日本民族特有の音楽表現に触れ、豊かな幅広い音楽的視野を持つことをねらいとする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 日本音楽の基礎的理論について
日本音楽の音階、記譜法と読譜法、東アジア諸国（中国、韓国 etc）との関連性
- 第 3 回 日本音楽の歴史と概略
伝統音楽の時代的流れ、庶民の音楽の時代的流れ、楽曲の形式、楽曲の分類
- 第 4 回～第 6 回 邦楽における歌唱法
歌唱法（歌もの／語りもの）の時代的変遷、歌もの（地歌、組歌、長唄、小唄、端唄、民謡 etc）の概略と作品の鑑賞、語りもの（謡曲、田楽、狂言、新内、清元、常磐津、浄瑠璃 etc）の概略と作品の観賞、歌もの／語りものの発声法の実際
- 第 7 回 和楽器の演奏法Ⅰ
和楽器の分類と概略、和楽器の歴史、楽曲の鑑賞
- 第 8 回～第 13 回 和楽器の演奏法Ⅱ
箏の歴史と基礎知識、箏の演奏法、箏曲の鑑賞、練習曲と平易な楽曲の実技
- 第 14 回～第 15 回 和楽器の演奏法Ⅲ
三味線、尺八の歴史と基礎知識、三味線、尺八の演奏法、三曲合奏曲の鑑賞、練習曲と平易な楽曲の実技、まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
試験（ノートのみ持込可）50%、実技 30%、レポート 20%、伝統音楽の流れ、和楽器の演奏法を体験して学んでゆく為、欠席を減点の対象としその他授業中の態度を加味して評価する。

[4] 教 材

『実践「和楽器」入門』（ヤマハミュージックメディア）
その他、必要に応じて配布し、紹介する。

[5] 参考図書

授業中にその都度紹介する。

音楽文化Ⅱ		担当教員	くら た かよこ 倉 田 佳代子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

音楽学科生は、演奏コース・音楽療法コース・デジタル音楽創作コースに分かれ、それぞれの専門実技、専門理論・実践等に取り組んでいるが、本授業はそれらの専門分野を側面から支えていくための音楽教養・文化講座として開かれる。講座は、国内外から招聘する特別講師による講演、実習、演奏などが中心となって行われ、これらを通して音楽に関連する総合的な基礎知識を身に付ける。

[2] 授業の計画

- ① 講座、演奏会等は下記のそれぞれの分野に渡って企画・開催される。詳しい日程に関しては、平成 21 年度 4 月に発表される予定であるが、年度の途中において企画される講座等もあるので、その都度掲示板等の日程を確認すること。受講生には毎回のレポート提出が義務付けられている。

<前期>

- ・一般教養の分野より
- ・音楽療法の分野より
- ・鍵盤楽器の分野より
- ・声楽の分野より

<後期>

- ・一般教養の分野より
- ・管弦楽器の分野より
- ・音楽教育の分野より
- ・鍵盤楽器の分野より

- ② ①の学内で開催される音楽文化講座以外に、学外における任意の演奏会・講座等を聴講（年間 2 回）し、レポートを提出すること。

※詳細については「音楽学科履修のてびき」を参照のこと。

[3] 評価の方法

提出されたレポートにて評価を行う。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

その都度、プリント等を配布する。

ソルフェージュⅢ		担当教員	おおきしゅうこ 大 城 修 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

音楽を学ぶ者にとって、音を聴くことの重要性は忘れてはならないことである。また、楽譜に書かれていることをどのように音として再現、表現するかという課題はその読み方にあり、そのための基礎的能力を向上させることが、豊かな音楽表現に結びつくこととなる。ソルフェージュⅠ・Ⅱで身につけた基礎的能力をさらにのぼし、授業での訓練がより身につくことを望みながら、歌い、聴き、書き取り、弾き等を総合的に学習したい。

[2] 授業の計画

ソルフェージュ力によりクラスをA・Bに分ける。

第 1 回～第 2 回	旋律聴音、二声旋律聴音、四声体聴音	視唱
第 3 回～第 4 回	(〃)	視唱
第 5 回～第 6 回	(〃)	視唱
第 7 回～第 8 回	(〃)	視唱
第 9 回～第 10 回	(〃)	弾き歌い
第 11 回～第 12 回	(〃)	弾き歌い
第 13 回～第 14 回	(〃)	弾き歌い
第 15 回	実技テスト	

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技テスト（聴音、視唱、弾き歌い）で評価する。

[4] 教 材

『音楽史からみたリズム・スタディールネサンスから現代ー』（全音楽譜出版社）

[5] 参考図書

『モーツァルトを歌いながら学ぼう』（パリ.A ルデュック社）
『シューベルトを歌いながら学ぼう』（パリ.A ルデュック社）
『シューマンを歌いながら学ぼう』（パリ.A ルデュック社）

学内演奏Ⅱ		担当教員	くらた かよこ 倉田 佳代子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

各種の演奏を演奏者と一体となれる至近空間において聴き、鑑賞眼を養い、種々の目的での演奏行為に関する基礎知識を得る。

また、同時に個人単独の練習や学習では出来ない、演奏に関する総体的な学習を自主的、意欲的に行えるようにする。

[2] 授業の計画

1. 下記の学内で開催される学生による演奏会を聴講すること。演奏会については下記の通り。
 - ① 新入生歓迎演奏会
 - ② 学内演奏会（レポートを提出すること）
 - ③ 演奏研究演奏会
 - ④ 演奏特修演奏会
 - ⑤ 卒業演奏会
 - ⑥ 卒業研究発表会
 - ⑦ ディプロマコース演奏会（学外）
2. 上記②の学内演奏会に出演すること。
3. 1. 2. の他に、下記の分野別演奏会、研究発表会に出演及び参加すること。
 - ① ピアノ・オルガン専攻生 鍵盤楽器研究発表会
 - ② フルート・ヴァイオリン専攻生 アンサンブル演奏会
 - ③ 声楽専攻生 ヴォーカルコンサート
 - ④ 音楽療法コース 音楽療法研究発表会

※詳細については、「音楽学科履修のてびき」を参照のこと。

[3] 評価の方法

提出されたレポートにて評価を行う。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

演奏会の資料はその都度配付する。

学外演奏実践Ⅱ		担当教員	おおくぼ こうじ 他 大久保 功 治 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

音楽学科では学外に於いて、通年にわたり下記の演奏会を開催している。

サマーコンサート／県内公演又は県外公演

平成 22 年 8 月 5 日（木）敦賀公演

平成 22 年 8 月 6 日（金）福井公演

定期演奏会／金沢公演と福井公演の 2 回

平成 23 年 2 月（日程は後日発表する）

本授業では、上記の演奏会への練習過程（特別練習）と演奏会当日の出演及び演奏会運営に関連する様々な業務を通して、音楽を実践的に体験し、音楽家としての基本的姿勢を学習するものである。

[2] 授業の計画

サマーコンサート及び定期演奏会は日頃の音楽学習の成果を学外に発表するもので、学生は次の A, B, C の全てに参加しなければならない。

A. 演奏会のための特別練習（約 50 時間）

サマーコンサート及び定期演奏会開催日の約 2 週間前の期間に、特別に設定された練習日

B. 演奏会のためのリハーサル（約 8 時間）

演奏会当日の会場におけるリハーサル

C. 演奏会への出演及び舞台関連業務（約 12 時間）

- ・合唱メンバーとしてのステージ演奏
- ・受付・ステージ係等の演奏会運営に関する様々な業務

※詳細については、「音楽学科履修のてびき」を参照すること。

[3] 評価の方法

上記 A については 3 分の 2 以上の参加、B, C については必須参加とし、A, B, C のどの項目についても満足しなければ単位の認定は行わない。

[4] 教 材

上記[2]の授業参加を主たる内容としていて、教材の設定は特に無い。

合唱Ⅲ		担当教員	こまきしんすけ 小牧伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

「音楽する」ことの楽しさと、音の行く手に確かなものが存在することを希求しながら、アンサンブルを通して合唱の形態、言葉と声のありよう、和声感覚、合唱の練習方法を学ぶと共に、協力して一つのものを作ってゆくことの大切さの体得と、音楽的、社会的訓練を行う。
特に日本の合唱曲を歌う。

[2] 授業の計画

1. パート練習
2. 声と詩
3. 作品のねらい
4. 和声感覚
5. 音楽と社会

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心のため、授業期間中にその都度評価する。
欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

随時指示する。

[5] 参考図書

随時指示する。

[6] その他

演奏会発表につながる。

合唱Ⅳ		担当教員	こまきしんすけ 小 牧 伸 輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

「音楽する」ことの楽しさと、音の行く手に確かなものが存在することを希求しながら、アンサンブルを通して合唱の形態、言葉と声のありよう、和声感覚、合唱の練習方法を学ぶと共に、協力して一つのものを作ってゆくことの大切さの体得と、音楽的、社会的訓練を行う。
特に日本の合唱曲を歌うことを通して日本語の美しさや表現方法を学ぶ。

[2] 授業の計画

1. パート練習
2. 声と詩
3. 作品のねらい
4. 和声感覚
5. 発語方法
6. 音楽と社会

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心のため、授業期間中にその都度評価する。
欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

随時指示する。

[5] 参考図書

随時指示する。

[6] その他

演奏会発表につながる。

幼児音楽演習		担当教員	かわさき 川崎 美砂子・栗栖 勝栄
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

幼児期の音楽教育は、楽譜が読める、楽器が弾けるといった技術のみの習得ではなく、体験を通して、楽しいもの美しいものとして感じるができる、「美的教育」でなくてはならない。本演習では、実際行われている幾つかの幼児音楽教室の教育プログラムを取り上げ、その教育理論とアプローチ法を学び、より感性豊かな幼児音楽教育指導法のありかたを考えたい。

[2] 授業の計画（第4回～第8回栗栖担当）

- 第 1 回 音楽教育学概論
- 第 2 回 音楽教育の役目
- 第 3 回 幼児期の特徴と音楽的能力
- 第 4 回 ダルクローズの教育理念およびリトミック指導法と実践
- 第 5 回 音楽教育としてのリトミック
ピアノ教材の中でのリトミック指導法と実践
- 第 6 回 幼児期におけるリズム指導の必要性
感性を育てる指導法と実践
- 第 7 回 附属幼稚園 4・5 歳児対象リトミック指導の見学
- 第 8 回 リズム演習の実践と指導法（演奏法を含む）
- 第 9 回 ヤマハ音楽教室実践例
- 第 10 回 //
- 第 11 回 カワイ音楽教室実施例
- 第 12 回 //
- 第 13 回 コダーイ・ゾルタンの教育理念と指導法
- 第 14 回 コダーイシステムについて
- 第 15 回 仁愛子どものための音楽教室見学

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
川崎／单元ごとに授業内容、感想をレポートにより評価する。欠席は減点する。
栗栖／单元ごとに授業内容、感想をレポート及び簡単なリズムテストにより評価する。
欠席は減点する。

[4] 教 材

川崎／特にテキストは指定せず
栗栖／1. テキスト 岩崎光弘著『リトミックってなあに』（ドレミ楽譜出版社）
2. 教 具 カラーボード（赤・白・黄・青セット）とスティック
（リトミック研究センター制作）

[5] 参考図書

『コダーイ・システムとは何か』（全音楽譜出版社）
『わらべうた 音楽の理論と実践』（明治図書）
岩崎光弘著 『こどもがぐんぐん伸びる音楽あそび』

[6] その他

第4回から第8回までは、次の準備で臨むこと。
1. 動きやすい服装で受講に臨む（スカート不可）
2. 受講の際は底の薄いシューズ（ダンスシューズ等）又は裸足が望ましい。

ピアノアンサンブルⅠ		担当教員	なかのけんや他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

演奏形態は連弾とする。独奏とは違った演奏体験を通して、楽曲における個々の音楽語法の研究を行う。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 課題曲の選曲、使用テキストの選定
- 第 2 回 平易な楽曲により、連弾における基本的な注意点を考える
- 第 3 回 連弾における音のバランスを考える
- 第 4 回 選定した楽曲の基本的特徴を学ぶ
- 第 5 回 選定した曲の時代様式について考える
- 第 6 回 アンサンブルにおける個々の役割について考える
- 第 7 回 連弾におけるペダリングについて考察する
- 第 8 回 連弾におけるペダリングを実践する
- 第 9 回 作品の時代背景をふまえた解釈について考察する
- 第 10 回 試験曲の決定を行う
- 第 11 回 試験曲として選定した楽曲の基本的特徴を学ぶ
- 第 12 回 試験曲の時代様式および作曲家の歴史的役割について考える
- 第 13 回 試験曲の仕上げに取りかかる
- 第 14 回 試験曲の仕上げを完成させる
- 第 15 回 試験を兼ねた発表（公開演奏）を行う

※受講生の構成、学習の進行状況により、授業内容は前後します。

[3] 評価の方法

授業への取り組みなどを考慮した上で、実技試験における演奏で評価を行う。
試験期間中の試験は行わず、15 回目の授業において受講学生全員の前で試験を兼ねた公開演奏を行う。
欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

教材については、その年度の受講生の構成によって適切な楽曲を教員が選ぶ。

- (出題例) モーツァルト：4 手のためのピアノ・ソナタ
- ドビュッシー：小組曲
- ブラームス：ハンガリー舞曲
- ドヴォルザーク：スラヴ舞曲 等

ピアノアンサンブルⅡ		担当教員	なかのけんや他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ピアノ・アンサンブルⅠで習得した基礎をもとに、連弾曲（自由曲）を教材とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 選曲と使用テキストの選定
- 第 2 回 選定した楽曲の基本的特徴を学ぶ
- 第 3 回 連弾における音のバランスを再び考察する
- 第 4 回 選定した曲の時代様式について考える
- 第 5 回 アンサンブルにおける個々の役割について考える
- 第 6 回 和声について考察する
- 第 7 回 連弾におけるペダリングについて考察する
- 第 8 回 連弾におけるペダリングを実践する
- 第 9 回 作品の時代背景をふまえた解釈について考察する
- 第 10 回 試験曲の決定を行う
- 第 11 回 試験曲として選定した楽曲の基本的特徴を学ぶ
- 第 12 回 試験曲の時代様式および作曲家の歴史的役割について考える
- 第 13 回 試験曲の仕上げに取りかかる
- 第 14 回 試験曲の仕上げを完成させる
- 第 15 回 試験を兼ねた発表（公開演奏）を行う

※受講生の構成、学習の進行状況により、授業内容は前後します。

[3] 評価の方法

授業への取り組みなどを考慮した上で、実技試験における演奏で評価を行う。

試験期間中の試験は行わず、15 回目の授業において受講学生全員の前で試験を兼ねた公開演奏を行う。

欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

曲目については、受講生の構成によって適切な楽曲を教員と相談の上で決定する。

[6] その他

試験曲だけでなく、複数の楽曲を勉強するよう心掛けること。

室内楽基礎演習		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功 治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

「主科実技Ⅰ・Ⅱ」において独奏による音楽表現を経験した学習者は、本授業・室内楽において、個々の音楽表現が音楽構成の一部（パート）である事を確認すると同時に、複数のパートを統合したひとつの音楽作品の完成を要求される。本授業は、この学習段階を通して音楽的構成（ディナーミク・アコーギク、和声、リズム等）や楽器演奏技術についてのさらに幅広い音楽経験を、学習者が享受することをねらいとする。

[2] 授業の計画

- 本授業においては、主として古典派及び、ロマン派の楽曲を教材として使用する。
- 第 1 回～第 2 回 教材についての研究／古典派楽曲の中心となる音楽構造の学習。
作曲者の音楽的特徴。編曲者の意図。各楽器の使用的特徴。
- 第 3 回～第 4 回 各パートの音楽的役割と、音量バランスについて。
- 第 5 回～第 7 回 ディナーミク、アコーギクの学習。純正調における和音感覚。
- 第 8 回～第 10 回 実際の演奏に則した効果的音楽表現の研究と、発表。
- 第 11 回～第 12 回 教材についての研究／ロマン派楽曲の中心となる音楽構造の学習。
作曲者の音楽的特徴。編曲者の意図。各楽器の使用的特徴。
- 第 13 回～第 15 回 各パートの音楽的役割と、音量バランスについて。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心となるため、授業期間中にその都度評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

受講者の人数、楽器、能力等に応じた楽曲を選択し教材とする。

[5] 参考図書

北村 薫『フルート合奏のためのアンサンブル・エチュード』
(ムラマツ フルード レッスンセンター出版 1992)

室内楽研究		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功 治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は室内楽基礎演習を基本とし、それをさらに発展・応用させることにより、音楽的構成（ディナーミック・アコーギク、和声、リズム等）や楽器演奏技術についてのさらに幅広い音楽経験を学習者が享受することをねらいとする。

[2] 授業の計画

本授業においては、主としてロマン派の楽曲、近代・現代の楽曲を教材として使用する。

第 1 回～第 2 回 教材の研究／ロマン派楽曲の音楽構造を学習や作曲の音楽的特徴を探る。

第 3 回～第 5 回 各パートの音楽的役割と音量バランス、ディナーミック、アコーギクの学習。

第 6 回～第 7 回 実際の演奏に則した効果的音楽表現の研究と発表。

第 8 回～第 9 回 教材の研究／近代の楽曲の音楽的特徴を探る。

第 10 回～第 12 回 近代奏法の学習と音楽的構造との関連について学習する。

第 13 回～第 15 回 実際の演奏に則した効果的音楽表現の研究と発表。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技が中心となるため、授業期間中にその都度評価する。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

受講者の人数、楽器、能力等に応じた楽曲を選択し教材とする。

歌曲基礎演習		担当教員	こ まき しん すけ 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、声楽を主専攻とする学生のために開かれたもので、芸術歌曲の分野でも重要な位置を占める「ドイツ歌曲(ドイツリート)」について、その歌唱技術を習得するための基礎演習を目的とする。

代表的なドイツリートを取り上げ、実際に詩を朗読することを通して、まず正しいドイツ語の発音を学び、ドイツ語の詩に慣れ親しむ。更に、詩の内容を知って、作曲者の音楽を感じ取りながら、ドイツ語の発音にふさわしい発声で歌えることを目指す。

[2] 授業の計画

主として“歌曲の王”と称されるシューベルト(Franz Schubert)の名曲から数曲を題材として取り上げ、学生個々の声種・音域に合った調を選び、順を追って学習を進める。

- 第 1 回 ドイツ歌曲の背景…ドイツ・ロマン派時代に開花した独自の芸術、ピアノの歴史との関連。
- 第 2 回 「春への憧れ Frühlingsglaube」, 「野ばら Heidenröslein」, 「アヴェ・マリア Ave Maria」の有節歌曲 3 曲より選択した曲について、楽曲分析(有節歌曲 Strofenlied の特質)。
- 第 3 回 選択した曲について詩語の意味に沿った発音、ディクシオン、歌唱。
- 第 4 回 引き続き、選択した曲について詩語の意味に沿った発音、ディクシオン、歌唱。
- 第 5 回 選択した曲について、詩人の背景と詩語の内容把握をふまえたディクシオンと歌唱。
- 第 6 回 次に選択した曲について、詩語の意味の把握と発音、ディクシオン、歌唱。
- 第 7 回 選択した曲について、詩語の意味に沿ったディクシオン、歌唱。
- 第 8 回 選択した曲について、詩人の背景と詩の内容の把握と歌唱。
- 第 9 回 選択した曲について、引き続き正しいディクシオンと歌唱。
- 第 10 回 3 曲目の曲について、詩語の意味の把握と発音、ディクシオン、歌唱。
- 第 11 回 3 曲目の曲について、詩語の意味に沿ったディクシオン、歌唱。
- 第 12 回 3 曲目の曲について、詩人の背景と詩の内容の把握と歌唱。
- 第 13 回 3 曲目の曲について、引き続き正しいディクシオンと歌唱。
- 第 14 回 学習してきた 3 曲よりテスト曲を選択して、暗譜で歌唱。
- 第 15 回 前期テストとして、一曲を暗譜で歌い、他の学生の演奏を聴き、次の学習への参考・糧とする。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

歌唱の実技テスト(70%)と、授業への取り組み(30%)とを総合して評価する。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『シューベルト歌曲集 中・高声用』(ペータース版)

[5] 参考図書

『歌唱のためのドイツ語発音法』(音楽之友社)

[6] その他

ドイツリートはピアノ伴奏と一体となる楽曲なので、ピアニスト同伴で受講のこと。毎回のレッスンには各自録音テープ(MD等)を持参すること。

歌曲研究		担当教員	こ 小 牧 伸 輔 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、前期の「歌曲基礎研究」に続く学習として開かれたもので、芸術歌曲の分野でも音楽史上特に重要な位置を占める「ドイツリート」について、表現の背景となる詩の解釈と実際の歌唱技術を研究することを目的とする。

ドイツの風土と歴史を土壌として、文豪ゲーテに代表されるドイツロマン派詩人によるドイツ詩の名作を原語で味わい、同時代(19 世紀)にピアノが今日の楽器として完成したことによる、ピアノ伴奏の重要な役割も土台として、ドイツリート独自の歌唱表現を目指していく。

[2] 授業の計画

ここでは、有節歌曲に加えて通作歌曲(Ballade)の名曲も題材として取り上げ、ドイツリートの豊かな音楽の世界を味わいながら、更にドイツ語の発音に慣れるよう学習を進める。

第 1 回 シューベルト「鱒 Die Forelle」、「ミニョンの歌 Mignonslied」、モーツァルト「すみれ Das Veilchen」の順に学習。この 3 曲について世界的リート歌手の演奏を CD で鑑賞。

第 2 回 「鱒 Die Forelle」についてテキスト(詩)の朗読、詩語の意味と解釈。

第 3 回 「鱒 Die Forelle」について引き続き正しいドイツ語の発音、ディクシオン、歌唱。

第 4 回 「鱒 Die Forelle」について楽曲分析、ディクシオン、歌唱。

第 5 回 「鱒 Die Forelle」について、引き続きディクシオンと歌唱。

第 6 回 「ミニョンの歌 Mignonslied」について、テキスト(詩)の朗読、詩語の意味と解釈。

第 7 回 「ミニョンの歌 Mignonslied」について、出典小説「ウィルヘルム・マイスター」との関係。

第 8 回 「ミニョンの歌 Mignonslied」について、楽曲分析、ディクシオン、歌唱。

第 9 回 「ミニョンの歌 Mignonslied」について、引き続き正しいディクシオンと歌唱。

第 10 回 「すみれ Das Veilchen」について、テキスト(詩)の朗読、詩語の意味と解釈。

第 11 回 「すみれ Das Veilchen」について、詩語の意味に沿ったディクシオン、歌唱。

第 12 回 「すみれ Das Veilchen」について、楽曲分析、ディクシオン、歌唱。

第 13 回 「すみれ Das Veilchen」について、引き続き正しいディクシオンと歌唱。

第 14 回 学習してきた 3 曲よりテスト曲を選択して、暗譜で歌唱。

第 15 回 後期テストとして、一曲を暗譜で歌い、他の学生の演奏を聴き、次の学習への参考・糧とする。

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。

歌唱の実技テスト(70%)と、授業への取り組み(30%)とを総合して評価する。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『シューベルト歌曲集 中、高声用』、『モーツァルト歌曲集 高、低声用』(ペータース版)

[5] 参考図書

『D. フィッシャー・ディスカウ/シューベルト歌曲リサイタル』、『白井光子/シューベルトリサイタル』、『エディト・マティス/ソプラノリサイタル』CD 演奏

[6] その他

ドイツリートはピアノ伴奏と一体となる楽曲なので、ピアニスト同伴で受講のこと。

音楽心理学		担当教員	ぬき 貫	みち 行	こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
講義	2単位	2年次前期	選択		

[1] 授業のねらい

- a) 学会認定音楽療法士の資格取得に役立つことを意図する。
- b) 音楽心理学は、音楽療法の基礎科学であり必須と考えられる。
- c) 音楽と人間の精神活動や行動との関係について、実証的に研究する。
- d) 音や音楽の構成要素について、人間に与えられる影響を、生理学的、心理学的、社会的に究明する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 音楽心理学の定義と歴史
- 第 2 回 音楽心理学と音楽療法の関連性—どのように役立てるか
- 第 3 回 音および音楽構成要素の知覚と認知
 - a. 音響と音楽との違い
 - b. 音の要素—大きさ、長さ、高さ、音色
- 第 4 回 音および音楽構成要素の知覚と認知
 - c. 音楽の要素—旋律、リズム、音声、テンポ
- 第 5 回 音楽と情動
 - a. 感性の測定方法
 - b. 生理心理学的な研究方法
- 第 6 回 音楽と情動
 - c. 音楽の機能—活性化音楽と沈静化音楽
 - d. 音楽様式のちがい
- 第 7 回 音楽と記憶
- 第 8 回 脳と音楽—音楽の神経心理学、脳機能と歌唱能力
- 第 9 回 音楽行動—創作、演奏、聴取
- 第 10 回 音楽能力の発達
- 第 11 回 音楽の好みとパーソナリティ、音楽の社会心理学
- 第 12 回 環境音楽への取り組み—定義、適用、効果
- 第 13 回 Psychological Abstracts より：英語論文要旨の講読
- 第 14 回 前回に引き続き学生による発表
- 第 15 回 世界最先端の音楽心理学研究のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施せず、①授業中の課題の遂行、②レポート提出により評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

2009 音楽心理学音楽療法研究年報 第 38 巻 日本音楽心理学音楽療法懇話会

[5] 参考図書

- 谷口高士編著『音は心のなかで音楽になる』（北大路書房 2000）
 国安愛子著『情動と音楽』（音楽之友社 2005）
 梅本堯夫編著『音楽心理学の研究』（ナカニシヤ出版 1996）
 ラドシーとボイル著・徳丸吉彦他訳『音楽行動の心理学』（音楽之友社 1985）
 貫行子著『バイオミュージックの不思議な力』（音楽之友社 1992）
 ハーグリーヴス編・磯部他訳『音楽の社会心理学～人はなぜ音楽を聴くのか～』
 （東海大学出版会 2004）
 スナイダー、須藤他訳『音楽と記憶』（音楽之友社 2003）

主科実技Ⅲ（ピアノ）		担当教員	くらた かよこ 倉田 佳代子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

- 1) 華麗、繊細、透明かつ正統な演奏技法の開発と習得。
- 2) 各時代の作曲家とその楽曲の様式の知的、感覚的理解と芸術的表現の方法の習得。

[2] 授業の計画

次の内容を、各個人の能力、経験の深さに適した教材を選択し、その理解度、演奏能力の発達過程を観察評価しながら個人別カリキュラムを組み立てて学習する。

- 1) 高度な演奏技法の習得。
- 2) ロマン派によって開発された演奏技法の研究。

第 1 回～第 5 回

学習 a スケールとアルペジオ～第 3 回目に第 5 回グレード・ヒアリングを実施する。

学習 b 個人の能力、進度に応じた練習曲による演奏技法の研究。腕や指の独立と強化演奏姿勢等身体条件の整備、華麗かつ流麗な演奏技法の習得。レガート奏法の習熟。軽快な技巧の習得。レジエロな表情の練習。終止法の効果の再認識。

学習 c 古典から 20 世紀までの音楽から自由に選択し学習する。（次項は、ロマン派の楽曲への入門のための参考）

- ・シューベルト～即興曲、性格的小品の研究。歌曲と器楽曲との関連。ソナタ形式による楽曲の研究。ハーモニー運用の特性の理解と演奏法。

- ・ショパン～即興曲、舞曲の研究。ポーランドの音楽土壌について。ショパンによって開発された近代演奏技法の研究。スケルツォ、バラード、ソナタの研究

第 6 回 課題曲（練習曲）リハーサル。

スケールとアルペジオに関する第 6 回グレード・ヒアリング（最終回）

第 7 回～第 15 回（学習 a～c の継続）

学習 c の完成度を高める研究。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。次の実技試験の結果により評価される。

課題曲テスト（練習曲）

自由曲テスト（10 分以内の曲。作曲年代は問わない）

[4] 教 材

楽譜については指導教員の指示に従い原典版を使用することが望ましい。

[5] 参考図書

公開講座、特別講座等で得た知識を十分に自己の楽曲の練習や演奏に生かすこと。

主科実技Ⅲ（フルート）		担当教員	おおくぼ こうじ 他 大久保 功 治 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、一年次において履修した「主科実技Ⅰ・Ⅱ」の延長上にあるものであり、下記の三つについて学習、修得することを主たる目的とする。

1. 管楽器の基本的演奏技術とその応用
2. 作品に内在する形式感、感情、思想等の管楽器による表現方法
3. 学習者の個々の個性に応じた音楽表現方法

[2] 授業の計画

教材については、①教則本②練習曲集③楽曲（バロック、古典派、ロマン派、近代）の3種類を並行して使用する。①、②については、下記の教材の項目より個々の能力に応じたものを使用し、全調にわたる高度な演奏能力の習得を目的とする。また、③については、個々の能力に応じた楽曲を選曲し使用する。

- 第 1 回～第 4 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
 ♭3 つまでの長・短調の練習曲。
 バロック時代の音楽研究／通奏低音理論、装飾法、即興性について
- 第 5 回～第 10 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
 ♭4～6 までの長・短調の練習曲。
 古典派の協奏曲の研究／ソナタ形式について、カデンツの構造
- 第 11 回～第 15 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
 ♯3 つまでの長・短調の練習曲。
 ロマン派の音楽研究／和音感のある音色について、ディナーミックを正確に表現するための呼吸法について、ヴィブラートの応用

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 実技が中心となるため、授業期間中にその都度評価する。
 また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

教則本・練習曲集の楽譜については、特に出版社を指定しない。
 『Andersen, 24 Studies op. 21』／『Boehm, 24 Caprices op. 26』
 『Boehm, 24 Melodious Studies』／『Fürstenau, Bouquet Des Ton op. 125』
 『Moyse, 音階と分散和音（フルートのための 480 の技術練習）』

[5] 参考図書

マルセル・モイーズ『Exercices Journaliers』（ルディック出版）
 ペルリート『フルートのモダン・フィンガリング』（パイパース 1974）
 マルセル・モイーズ『Comment j' ai pu maintenir ma forme Volum I』（ルディック出版）
 マルセル・モイーズ『Tone development through interpretation』（ルディック出版）

[6] その他

その他の管・打楽器については、フルートに準ずる。

主科実技Ⅲ (声楽)		担当教員	つば 坪 田 のぶ 子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

「主科実技Ⅰ・Ⅱ」で培われた発声の基本と音楽表現力を土台にして、前半ではヘンデルやヴィヴァルディなどの作品を通してイタリア古典バロック作品に焦点を当てた学習とし、後半ではロッシーニやドニゼッティなどのイタリアロマン派、更にレオンカヴァッロ、マスカーニ等イタリアオペラ作曲家の歌曲作品に題材を移して、ベル・カント発声法とテンポ・ルバートの呼吸法の修練を共に進める。

[2] 授業の計画

各々の段階に応じた実技演習(個人レッスン)であるため、毎回次の二分野に渡ってそれぞれ到達の目標をたて、順次レッスンを進める。

- ①発声/a. 2度～オクターヴに渡るパターン音形によるヴォイス・ウォームアップ。
b. 発声教則本を用いた母音唱法(ヴォカリーズ)による「声」と「息(ブレス)」の鍛錬。
- ②楽曲による表現/(前半)ヴィヴァルディ、ヘンデル等のアリア作品から、バロック作品特有の端正で清潔な音楽表現の様式感と、装飾音形の研究。
(後半)レオンカヴァッロ、マスカーニ等イタリアオペラ作曲家歌曲の緩急法と発声法の研究。
 - 第1回 ヴィヴァルディ又はヘンデルのアリアの出典となる歌劇について学習
 - 第2回 ヴィヴァルディ又はヘンデルのアリアそれぞれのディクシオン(読み)と詩の内容の把握
 - 第3回 ヴィヴァルディ又はヘンデルのアリアそれぞれの楽曲分析とフレージング
 - 第4回 ヴィヴァルディ又はヘンデルのアリアの装飾音形の研究
 - 第5回 バロック・アリアの様式感、特に Da capo aria の表現法の把握
 - 第6回 バロック・アリアから選曲した曲について、学生相互の暗譜による歌い合いと合評
 - 第7回 前期第一回実技テスト。異学年相互に各々の楽曲の演奏を聴き、次の学習へ資する
 - 第8回 イタリア近代歌曲、特にオペラ作曲家の歌曲作品から選曲。ディクシオンと詩の内容の把握
 - 第9回 選曲したイタリアオペラ作曲家の「オペラ作品」を視聴して様式感と作曲の特質を学習
 - 第10回 選曲したイタリアオペラ作曲家の歌曲作品で、ベル・カント発声法の修練
 - 第11回 引き続き、選曲したイタリアオペラ作曲家の歌曲でベル・カント発声法の修練
 - 第12回 選曲したイタリアオペラ作曲家の歌曲作品で、緩急法(アゴーギク)と呼吸法の関連学習
 - 第13回 引き続き、選曲したイタリア作曲家の歌曲での緩急法(アゴーギク)と呼吸法の関連学習
 - 第14回 学生相互の暗譜による歌い合いと合評
 - 第15回 前期第二回実技テスト。異学年相互に各々の楽曲の演奏を聴き、次の学習へのステップとする
後期前半で学習する日本歌曲より課題を選曲し、夏期休暇中の学習課題とする。

[3] 評価の方法

2回の実技テストにより評価する。

欠席、遅刻、早退及び情行の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

『コンコーネ 50番 中声用』(全音楽譜)、『ヴィヴァルディ歌曲集』(Ricordi 社版)
『ヘンデルアリア集 1, 2, 3』、『イタリア近代歌曲集』(全音楽譜出版)

[5] 参考図書

授業過程で、適宜 CD, DVD 等で演奏例と関連の音楽書を紹介していく。

[6] その他

授業外学習として、声楽を含めた様々なジャンルのコンサートを鑑賞して、生の演奏の響きに数多く触れる機会を数多く持つことを期待する。

主科実技Ⅳ（ピアノ）		担当教員	くらた かよこ 倉田 佳代子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

- 1) バロック時代の古典舞曲の理解。
- 2) 各時代の作曲家とその楽曲の様式の知的、感覚的理解と芸術的表現の方法の習得。

[2] 授業の計画

次の内容を、各個人の能力、経験の深さに適した教材を選択し、その理解度、演奏能力の発達過程を観察評価しながら個人別カリキュラムを組み立てて学習する。

- 1) バッハのフランス組曲の研究。
- 2) 時代様式の概観。
- 3) 個人の能力に応じた演奏会用楽曲の研究と演奏法の実践。

第 1 回～第 5 回

学習 a 個人の能力、進度に応じた練習曲による。より高度な演奏技法の開発。

学習 b バッハ～フランス組曲の研究～各舞曲の性格、音楽的内容についての研究。

ハーモニーの分析。フランス様式とイタリア様式の違い。カンタービレ、装飾音の奏法。演奏技法の研究等。

学習 c 古典から 20 世紀までの音楽から個人の能力に応じて自由に選択し学習する。

（次項は、学習参考資料）

- ・ロマン派音楽～絵画と文学等歴史的背景の研究。作曲技法の理解。ハーモニーの運用の特性の感得。構造的楽曲（ソナタ、変奏曲等）の研究。演奏技法の展開。
- ・印象派の楽曲の研究～ガイダンス。ドビュッシー、ラヴェル等のピアノ用楽曲の研究。絵画、文学等歴史的背景の研究。
- ・プロコフィエフ、バルトーク等 20 世紀の作曲家の作品入門。
- ・その他の作曲家（バロック、古典派、ロマン派、フランスおよびロシアのロマン派、印象派、民族楽派諸家等）

第 6 回 バッハ課題テスト（フランス組曲。年により平均律ピアノ曲集のこともある）

第 7 回～第 14 回（学習 a～c の継続）

学習 c の完成度を高める研究。

第 15 回 卒業演奏会（公開）の心得、準備、実践等。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。次の実技試験の結果により評価される。

バッハテスト（フランス組曲～任意の 1 楽曲よりアルマンド、サラバンドの 2 曲とクーラント又はジークのいずれかより計 2～4 つの舞曲）

自由曲テスト（10 分以内の曲。作曲年代は問わない）

[4] 教 材

楽譜については指導教員の指示に従い原典版を使用することが望ましい。

主科実技Ⅳ (フルート)		担当教員	おおくぼ こうじ 他 大久保 功 治 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、一年次において履修した「主科実技Ⅰ・Ⅱ」の延長上にあるものであり、下記の三つについて学習、修得することを主たる目的とする。

1. 管楽器の基本的演奏技術とその応用
2. 作品に内在する形式感、感情、思想等の管楽器による表現方法
3. 学習者の個々の個性に応じた音楽表現方法

[2] 授業の計画

教材については、①教則本②練習曲集③楽曲（ロマン派、近代、現代）の3種類を並行して使用する。①、②については、下記の教材の項目より個々の能力に応じたものを使用し、全調にわたる高度な演奏能力の習得を目的とする。また、③については、個々の能力に応じた楽曲を選曲し使用する。

- 第 1 回～第 4 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
#4～5 までの長・短調の練習曲。
ロマン派の音楽研究／豊かなディナーミクを得るための練習法。
- 第 5 回～第 10 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
全調にわたる練習曲及び、近代・現代練習曲集。
近代・現代の音楽研究／近代奏法について、無調と変拍子について。
- 第 11 回～第 15 回 全調にわたる音階と分散和音の応用練習
全調にわたる練習曲及び、近代・現代練習曲集。
近代・現代の音楽研究／近代奏法について、合理的運指法（替え指のテクニック）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心となるため、授業期間中にその都度評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

教則本・練習曲集の楽譜については、特に出版社を指定しない。
『Andersen, 24 Virtuosity Studies op. 60』／『Boehm, 24 Caprices op. 26』
『Fürstenaу, Bouquet Des Ton op. 125』／『Karg-Elert, 30 Studies op. 107』
『Jeanjean, Etudes Modernes』
『Moyse, 音階と分散和音（フルートのための 480 の技術練習）』

[5] 参考図書

マルセル・モイーズ『Comment j'ai pu maintenir ma forme Volum I』（ルディック出版）
マルセル・モイーズ『Tone development through interpretation』（ルディック出版）
ペルリート『フルートのモダン・フィンガリング』（パイパース 1974）

[6] その他

その他の管・打楽器については、フルートに準ずる。

主科実技Ⅳ (声楽)		担当教員	つば 坪 田 のぶ 子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

これまでに学習して培われた「発声」の技術と「音楽表現力」を更に発展させるために、前半では、「日本歌曲」を取り上げ、日本語による声楽表現の入門とする。また、後半では、二カ年の学習過程を見渡し、時代様式と楽曲スタイルの変化と多様性の妙味に着眼して総合力を発揮した表現学習を進める。

[2] 授業の計画

各々の段階に応じた実技演習(個人レッスン)であるため、毎回次の二分野に渡ってそれぞれ到達の目標をたて、順次レッスンを進める。

①発声/a). 2 度～オクターヴに渡るパターン音形によるヴォイス・ウオームアップ

b). 発声教則本を用いた母音唱法(ヴォカリーズ)による「声」と「息(ブレス)」の鍛錬

②楽曲による表現/(前半)主に、「中田喜直」の歌曲作品を題材として日本歌曲の特質の学習
(後半)二カ年の集大成として、学生の個性が発露し更なる表現技術の向上が期待できる選曲をして、卒業演奏発表に向かって学習。

第 1 回 「中田喜直」の作品(代表的な作品)から各人に適した選曲をして、作詩、作曲の経緯を学習

第 2 回 選曲した中田歌曲の「詩」のディクシオン(美しく正しく音読)と、詩の内容の解釈

第 3 回 選曲した中田歌曲の作曲からみた楽曲分析とフレージングの読み取り

第 4 回 選曲した中田歌曲の美しい「日本語」の発音と「ハーモニー」上の音色の研究

第 5 回 選曲した中田歌曲の「日本語」と「ベル・カント発声法」の密接な関係の学習

第 6 回 選曲した中田歌曲について、学生相互の暗譜による歌い合いと合評

第 7 回 後期第一回実技テスト。異学年相互に各々の楽曲の演奏を聴き、次の学習へ資する

第 8 回 学生個々の実技到達度に適し、本人の学習意欲にも適う楽曲を、原則として「モーツァルトのアリア」(又はコンサート・アリア)からと自由曲(歌曲)の 2 曲で選曲し、楽曲の背景を学習

第 9 回 「アリア」の出典となる歌劇作品の視聴、自由歌曲のディクシオンと詩の内容の把握

第 10 回 「アリア」のディクシオンと歌詞の内容把握、歌曲の楽曲分析とフレージング

第 11 回 「アリア」の楽曲分析とフレージング、歌曲の暗譜による歌唱表現

第 12 回 「アリア」の人物表現と発声法、歌曲と共に、録音による客観的把握

第 13 回 引き続き「アリア」の人物表現と発声法、歌曲と共に、録音による客観的把握

第 14 回 「アリア」と歌曲について、学生相互の暗譜による歌い合いと合評

第 15 回 後期第二回実技テスト。異学年相互に各々の楽曲の演奏を聴き、卒業発表へのステップとする

[3] 評価の方法

2 回の実技テストにより評価する。

欠席、遅刻、早退及び情行の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

特に指定はない。選曲により適宜対処する。

[5] 参考図書

授業過程で、適宜 CD, DVD 等で演奏例と関連の音楽書を紹介していく。

[6] その他

卒業研究発表に備えるためにも、普段の練習過程からできるだけ広い空間でのびのびとした発声と響が身につくよう心がけること。

音楽療法概論Ⅱ		担当教員	ぬき 貫	みち 行	こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
講義	2単位	2年次後期	選択		

[1] 授業のねらい

- a. 学会認定音楽療法士の資格取得に役立つことを意図する。
- b. すでに音楽療法概論Ⅰを学習したことを前提として、音楽療法についての知識と理解をいっそう深め、実践に役立つようにする。
- c. 卒業論文のための「音楽療法の研究方法」と「論文のまとめ方・書き方」について指導する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 音楽療法治療理論の補充（生理学的・人間学的など）
- 第 2 回 音楽療法の脳のメカニズム
- 第 3 回 胎教・未熟児・発達障害児への音楽療法
- 第 4 回 青春心身症・不登校への音楽療法
- 第 5 回 失語症への音楽療法
- 第 6 回 ヒーリングとストレス緩和
- 第 7 回 リハビリテーションに対する神経学的音楽療法
- 第 8 回 認知症予防のための高齢者への音楽療法
- 第 9 回 ホスピス・緩和ケアにおける音楽療法
- 第 10 回 音楽療法の研究方法—量的研究と質的研究
- 第 11 回 事例研究の進め方：記録と評価
- 第 12 回 卒業論文のテーマの決め方
- 第 13 回 論文の基本的な構成と卒業論文の書き方
- 第 14 回 個々人の卒業論文指導
- 第 15 回 世界最先端の音楽療法の動向

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、卒業論文及びレポート等により評価する。
欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

- 貫 行子著『新訂 高齢者の音楽療法』（音楽之友社 2009）
貫 行子・星野悦子共著『音楽療法 研究と論文のまとめ方』（音楽之友社 2009.3）

[5] 参考図書

- a. バント著・稲田訳 『音楽療法』（ミネルヴァ書房 1996）
- b. パヴリチェヴィク著・佐治他訳 『音楽療法の意味』（本の森 2002）
- c. ブルシア著・生野訳 『音楽療法を定義する』（東海大学出版会 2001）
- d. 若尾・岡崎著 『音楽療法のための即興演奏ハンドブック』（音楽之友社 1996）
- e. 黒川由紀子著 『高齢者の心理療法 回想法』（誠信書房 2005）
- f. 佐々木和佳他 『認知症ケアと予防の音楽療法』（春秋社 2009）

音楽療法実践 I		担当教員	の じり えみこ 野 尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

実際の現場での各領域における対象者ごとの実践の技法がねらいとなり、養護学校、作業所、福祉施設、病院、特別養護老人ホームなど、実習先に基づいた学習をする。まず実際の対象者を理解するために、その障害、症状について深く学習する。アセスメントから始まり、実践、記録、分析までの過程を実践の中で学ぶ。実際に対象者に向き合うことにより、セラピストとしての資質を身につける。実習で経験したことを生かし、音楽療法についての理解を深める。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 子どもの音楽療法における実習までの学習と準備
- 第 2 回 対象児理解、アセスメント、障害に対する音楽療法の実践計画
- 第 3 回 子どもの実際の現場としてメインセラピストとコワーカーを体験する
- 第 4 回 実習後のフィードバック、分析
- 第 5 回 前回に続き記録、評価法
- 第 6 回 成人の音楽療法における実習前の学習と準備
- 第 7 回 成人の音楽療法における対象者理解、アセスメントについての学習
- 第 8 回 成人の実際の現場としてメインセラピストとコワーカーを体験する
- 第 9 回 実習後のフィードバック、分析
- 第 10 回 高齢者の音楽療法における実習までの学習、対象者理解、アセスメント
- 第 11 回 高齢者の実際の現場としてメインセラピストとコワーカーを体験する
- 第 12 回 実習後のフィードバック、分析
- 第 13 回 子どもの音楽療法における症例報告
- 第 14 回 成人の音楽療法における症例報告
- 第 15 回 高齢者の音楽療法における症例報告

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポート、小テストを課す。
レポート・小テスト 2 回により評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

プリント配付

[5] 参考図書

随時紹介する

音楽療法実践Ⅱ		担当教員	の じり えみこ 野 尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

前半では、学生それぞれが実習先での対象者について、その治療目標、方法、結果と考察を発表し、それについて分析する。発表することにより、様々な問題点が浮かび、また解決する機会にもなる。後半では、それまでの実習体験を振り返り、どのような治療効果があったか分析し、また問題点を考察する。実際に、音楽療法士として現場に出られるように、最終的な学習をする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 学生による発表 その分析、考察 個人ケース・知的障害
- 第 2 回 学生による発表 その分析、考察 個人ケース・情緒障害
- 第 3 回 学生による発表 その分析、考察 個人ケース・肢体不自由、重複障害
- 第 4 回 学生による発表 その分析、考察 成人ケース・知的障害
- 第 5 回 学生による発表 その分析、考察 成人ケース・精神障害
- 第 6 回 学生による発表 その分析、考察 高齢者ケース・健康促進
- 第 7 回 学生による発表 その分析、考察 高齢者ケース・認知症
- 第 8 回 学生による発表 その分析、考察 高齢者ケース・脳血管障害
- 第 9 回 子どもの音楽療法における実習のまとめ、検討
- 第 10 回 前回に続き、子どもの音楽療法のまとめ
- 第 11 回 成人の音楽療法においてこれまでの実習のまとめ、検討
- 第 12 回 前回に続き、成人の音楽療法のまとめ
- 第 13 回 高齢者の音楽療法においてこれまでの実習のまとめ、検討
- 第 14 回 前回に続き、高齢者の音楽療法のまとめ
- 第 15 回 音楽療法実践技法のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポート、小テストを課す。
レポート・小テスト 2 回により評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

プリント配布

[5] 参考図書

随時紹介する

音楽療法各論		担当教員	の 野 尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

1. 事例を通して精神科・高齢者領域の対象理解を深める。
2. セラピーに必要な臨床音楽力の基礎、また応用力を身につける。
3. 音楽療法士としての資質や専門性を追求し、且つセラピストとしての感性を磨く。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 自己紹介 (1)なぜ音楽療法士をめざしたのか？ 興味をもったきっかけは？
(2)自分を知る、仲間を知る
(3)自分の音楽を知る、他人の音楽を知る（臨床音楽力小テスト）
- 第 2 回 性格検査、情景画
- 第 3 回～第 4 回 音楽療法の治療プロセス (1)事例紹介（神経症外来）
～個別療法について～ (2)自分の音楽を知る、紹介する（CD 持込）
- 第 5 回～第 6 回 音楽療法の治療プロセス (1)VIDEO 紹介
～集団療法について～ (2)実際の音楽を再現する
※レポート提出（老いのころと向き合う音楽療法）
- 第 7 回～第 8 回 ロール・プレイ学習 (1)セッションの計画・実施・振り返り
(2)クライアント・セラピスト体験（ペルソナ）
(3)季節感、五感刺激、適切な援助のタイミングと質や量
- 第 9 回 春夏秋冬～ある日のセッションを組み立てる～
- 第 10 回 伴奏テクニック（弾き歌い、歌いやすいアレンジを既存の曲で）
- 第 11 回 伴奏テクニック（♪荒城の月♪見上げてごらん夜の星を♪世界に一つだけの花 等）
- 第 12 回 文献紹介（くすりに頼らない非薬物療法より～回想法）
- 第 13 回 文献紹介（くすりに頼らない非薬物療法より～芸術療法）
- 第 14 回 文献紹介抄読会（興味のある文献を熟読し、紹介する）
- 第 15 回 文献紹介抄読会（興味のある文献を熟読し、紹介する）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施せず、レポートと各回行う実技テストにより評価する。
レポート 3 回 6 月・9 月・12 月／実技テスト 15 回
授業への取り組みもあわせて評価する。
その他授業進行の妨げになる行為についても減点する。

[4] 教 材

『今日から使える歌伴のすべて』（全音楽譜出版社 2007）
『老いのころと向き合う音楽療法』（音楽之友社 2002） ※ 6 月の読後レポートを課す

[5] 参考図書

講師側で随時用意する。

[6] その他

- (1)出席を重視する（臨床音楽力として必要な実技テストを毎回実施する為）
- (2)「感性磨き」をする為のワークを取り入れていく
- (3)「わかる」「わからない」「ここが特にわからない」等、意思表示をする（積極性を持つ）

音楽療法総合演習		担当教員	のじり 野尻	えみこ 恵美子・笠嶋	かさしま 道子	みちこ 道子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
演習	2単位	2年次通年	選択			

[1] 授業のねらい

2年次では音楽療法実習において、それぞれがメインセラピストとしての役割を果たさなくてはならない。そこでこの授業では、おもに実際のセッションで必要とされる音楽技法の習得を目指す。前期では精神科領域における音楽療法技法を習得する。後期では子ども領域、高齢者領域を行う。BED-MUSIC（松井）を用いた即興技法、障害の程度に応じた既成曲の使い方を中心に学習する。

[2] 授業の計画（前期 笠嶋・後期 野尻担当）

- 第 1 回 精神科におけるセッションについて
- 第 2 回 対象者理解について
- 第 3 回 精神科領域における音楽療法の目的について
- 第 4 回 精神科における歌唱曲の紹介
- 第 5 回 精神科における歌唱伴奏法（歌謡曲を中心に）
- 第 6 回 精神科における歌唱伴奏法（学生による実践）
- 第 7 回 精神科におけるセッションの組み方
- 第 8 回 セッションを進める際考慮すべきこと
- 第 9 回 精神科音楽療法の実践
- 第 10 回 フィードバック
- 第 11 回 評価および記録法
- 第 12 回 学生による模擬セッション
- 第 13 回 模擬セッションの評価
- 第 14 回 精神科音楽療法のまとめ
- 第 15 回 BED-MUSIC 中の背景音楽、反響技法の使い方
- 第 16 回 対話、モデリングの使い方
- 第 17 回 未解決技法、刺激技法の使い方
- 第 18 回 同質技法、呼びかけ技法の使い方
- 第 19 回 障害児セッションにおける既成曲の使い方および作曲
- 第 20 回 前回に引き続き、広汎性発達障害児対象
- 第 21 回 発達段階に応じた音楽の使い方
- 第 22 回 高齢者音楽療法における歌謡曲の伴奏法 軽度認知症対象
- 第 23 回 前回に引き続き、学生による実践
- 第 24 回 高齢者音楽療法における歌謡曲の伴奏法 重度認知症対象
- 第 25 回 前回に引き続き、学生による実践
- 第 26 回 高齢者音楽療法における唱歌の伴奏法
- 第 27 回 前回に引き続き、学生による実践
- 第 28 回 障害児音楽療法における音楽技法のまとめ
- 第 29 回 高齢者音楽療法における音楽技法のまとめ
- 第 30 回 全体を通したまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

前期：レポート、後期：小テスト2回で評価。授業進行の妨げになる行為についても減点する。

[4] 教 材

『歌謡曲のすべて（赤本）』（全音出版）

笠嶋道子著『そのままのあなたでいい 音楽療法士が現場を語る』（一橋出版）

プリント配布

音楽療法技法各論		担当教員	おおくぼ こうじ かわのひさとし おんちみか 大久保功治・河野久寿・恩地美佳
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

音楽療法のセッションを行うためには様々なテクニックを獲得する必要がある。本授業では①音楽療法合奏法②音楽療法伴奏法③民謡歌唱法についての学習を深め、臨床現場においての実践力を高める。

[2] 授業の計画

①音楽療法合奏法

第 1 回～第 5 回 臨床現場においては能動的音楽活動のほかに、受動的音楽活動として対象者の心理や状況に合わせた鑑賞を取り入れることがある。その際提供できる合奏の指導を行う。また、対象者が活動として合奏を行なう場合は、その水準に合わせて簡単な編曲をすることも必要とされる。そのため臨床現場を想定した既成曲のアレンジ法も学ぶ。

②音楽療法伴奏法

第 6 回～第 10 回 セッションを行うにあたっては、様々なジャンルの曲を伴奏する能力が要求され、また、活動内容に見合った伴奏を提供することも必要となってくる。授業では、コード・ネームの確認から始め、主に歌謡曲の伴奏法を学習する。

③民謡歌唱法

第 11 回～第 15 回 セッションでは民謡も使用する技術も必要となるが、学習する機会は限られており習得は困難である。本授業では様々な民謡の紹介から始め、その歌唱法、伴奏法、セッションでの提供方法を学ぶ。

[3] 評価の方法

①については、学外での演奏ボランティア活動への参加、演奏、授業態度等をもとに総合評価する。

②については実技試験、授業態度等をもとに総合評価する。

③については授業での取り組み、レポート等をもとに総合評価する。

最終評価については、上記①②③の総合評価によって行う。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

その都度、配布する。

[5] 参考図書

必要な時に、指示を行う。

障害児音楽療法論		担当教員	の 野 尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

音楽療法の対象は非常に幅広いが、この授業では発達障害児に対する音楽療法についての理解を深めることがねらいである。実践するにあたって必要とされる理論をまず学び、その後セッション場面を見ることで実践に備える。後半では学生それぞれが行なっているセッションについて発表し、その内容を分析する。理論については主にピアジェ、ウィニコット、マーラーの発達論を学習する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ピアジェの認知発達論（感覚運動段階）
- 第 2 回 ピアジェの認知発達論（表象的思考段階）
- 第 3 回 感覚運動段階における音楽活動
- 第 4 回 表象的思考段階における音楽活動
- 第 5 回 ウィニコットの母子関係論について
- 第 6 回 ウィニコットの理論の音楽療法への適用
- 第 7 回 マーラーの発達論（分離－個体化過程以前）
- 第 8 回 マーラーの発達論（分化期 練習期）
- 第 9 回 マーラーの発達論（再接近期 個体化の達成と対象恒常性のはじまり）
- 第 10 回 障害児音楽療法の事例検討①
- 第 11 回 障害児音楽療法の事例検討②
- 第 12 回 学生による実践発表①
- 第 13 回 学生による実践発表②
- 第 14 回 学生による実践発表③
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 授業での発表、レポート、授業での取り組みなどを総合的に評価する。
 また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

プリント配布

[5] 参考図書

授業の内容に応じ、随時紹介する。

副科鍵盤Ⅲ		担当教員	なかのけんや他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

副科鍵盤 I、副科鍵盤 II で履修した基本的技術の習得をさらに深めるとともに、J. S. バッハの作品を通じてポリフォニー音楽の構成と演奏法を学ぶ。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 課題曲の選曲、使用テキストの選定
- 第 2 回 読譜の確認
- 第 3 回 拍子、リズムの確認
- 第 4 回 ポリフォニー音楽の基本的特徴を学ぶ
- 第 5 回 ポリフォニー音楽の奏法 1 ー声部について
- 第 6 回 ポリフォニー音楽の奏法 2 ー声部の表現について
- 第 7 回 アーティキュレーションとは何かを学ぶ
- 第 8 回 アーティキュレーションの表現法を習得する
- 第 9 回 ポリフォニー音楽におけるペダリングを考える
- 第 10 回 ポリフォニー音楽におけるペダリングを実践する
- 第 11 回 暗譜の仕方を考える
- 第 12 回 ポリフォニー音楽における強弱について考える
- 第 13 回 ポリフォニー音楽における強弱を実践する
- 第 14 回 声部間のバランスを学ぶ
- 第 15 回 第 14 回までに学んだ内容の仕上げを行う

※学習の進行状況により、授業内容は前後します。

[3] 評価の方法

実技試験の点数で評価する。試験期間中の試験は行わず、別途試験の時間を設けて試験を行う。また、試験とは別に年間 4 回行われるグレードテストを受けなくてはならない。詳細については「音楽学科履修のてびき」をしっかりと読むこと。欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

- J. S. バッハ『インヴェンションとシンフォニア』
- 『平均律 クラヴィーア曲集』（なるべく原典版を使用のこと）
- 『プレ・インヴェンション』（全音出版）
- 『ハノン』※グレード未終了者のみ

[6] その他

やむをえず欠席する場合は、必ず指導教員に連絡のこと。

副科鍵盤Ⅳ		担当教員	なかのけんや他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

古典～近現代の作品の中から、個人の能力に応じた課題（自由曲）を選び、それぞれの作曲家の特徴を把握した演奏法を身につける事を目指す。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 課題曲の選曲、使用テキストの選定
- 第 2 回 読譜の確認
- 第 3 回 拍子、リズムの確認
- 第 4 回 選定した楽曲の基本的特徴を学ぶ
- 第 5 回 時代様式について考える
- 第 6 回 フレージングについて学ぶ
- 第 7 回 アーティキュレーションを実践する
- 第 8 回 試験曲の最終決定をする
- 第 9 回 作品の時代背景をふまえた解釈について考察する
- 第 10 回 テクニックと音楽表現との関連について考察する
- 第 11 回 暗譜に取り組む
- 第 12 回 耳によるペダリングについて考える
- 第 13 回 時代様式に相応しい強弱について考察する
- 第 14 回 試験曲の仕上げを行う
- 第 15 回 第 14 回までに学んだ内容の仕上げを行う

※学習の進行状況により、授業内容は前後する。

[3] 評価の方法

実技試験の点数で評価する。試験期間中の試験は行わず、別途試験の時間を設けて試験を行う。また、試験とは別に年間 4 回行われるグレードテストを受けなくてはならない。詳細については「音楽学科履修のてびき」をしっかりと読むこと。欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

各自、曲目に応じて担当教員の指示に従うこと。
『ハノン』※グレード未終了者のみ

[6] その他

やむをえず欠席する場合は、必ず指導教員に連絡のこと。

副科声楽Ⅲ		担当教員	つば 坪 田 信 子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

「副科声楽Ⅰ・Ⅱ」の学習を通して培った声楽の基礎的な知識と発声技能を更に発展させて、「声」による音楽表現力をより高く豊かに磨きあげる。また、学外での各種グレードテストや音楽資格検定に備えるために、「弾き歌い」の適切なスタイルを身につける。

[2] 授業の計画

所属コース毎に、各個人の到達度に応じて次の分野で毎回の個人レッスンを行う。

		演 奏	音楽療法・デジタル音楽創作
発声 練習		① 単純なパターンによるヴォイスウォームアップ ② 発声教則本を用いて、声と息のミキシング、横隔膜の支えとレガート唱法、声の質作りと音域の伸張、細かいアーティキュレーションや複雑で多様な調性の感得	
弾 き 歌 い	題 材	中学校、高等学校の音楽授業で使用するテキスト、イタリア古典歌曲集等から自由に数曲を選択	「にほんの歌 111」、中学校・高等学校音楽テキスト、童謡曲集等より自由に数曲を選択
	視 点	① 先ず、歌唱表現として適切な歌詞の解釈をペースにした言葉の明確な表出、より音楽的なフレージング法の研究 ② 次に、ピアノ伴奏として前奏・間奏・後奏のあり方と歌唱が入った時の表現法の研究 の2点に焦点を定めて互いに聴きあい、声とピアノのバランスを中心とした「弾き歌い」の適切なスタイルを探求する	

[3] 評価の方法

試験期間中に実技テストを行う。
「弾き語り」の実技テスト成績で評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『中学音楽』、『高校音楽』（教育芸術社版）
『にほんの歌 111』（ONKYO-SHA 版）
『イタリア歌曲集 第1巻』（全音楽譜出版）等、および各自で適宜選択した曲集

[5] 参考図書

授業の過程で状況に応じて、CD、LD等の演奏例を紹介、演奏の参考として鑑賞する。

副科声楽Ⅳ		担当教員	つば 坪 た 田 のぶ 子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

「副科声楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の学習を通して培った発声技法をもとに、多用な楽曲に触れて「声」による、より豊かな音楽表現法を探求していく。

[2] 授業の計画

所属コース毎に、各個人の到達度に応じて次の分野で毎回の個人レッスンを行う。

		演 奏	音楽療法・デジタル音楽創作
発声練習		① 単純なパターンによるヴォイスウォームアップ ② 発声教則本を用いて、声と息のミキシング、横隔膜の支えとレガート唱法、声の質作りと音域の伸張、細かいアーティキュレーションや複雑で多様な調性の感得	
学習内容	題材	イタリア古典歌曲集、イタリアロマン派歌曲集、日本歌曲集等から自由に数曲を選択	「にほんの歌 111」、イタリア古典、ロマン派歌曲集、童謡曲集等より自由に数曲を選択
	視点	イタリア古典歌曲からは今日の歌曲のスタイルの原型となった様式感を学び、さらにイタリアロマン派やイタリア近代歌曲からは人間性の自由な発露の表現法を、日本歌曲や童謡等からは日本語の詩の適切な解釈を源にした明晰な日本語の表出を目指すなど、ジャンルを指定せず、個人の進度、声の特質に応じて自由に選曲した題材をもとに、「声」による豊かな音楽表現法を探求する。	

[3] 評価の方法

試験期間中に実技テストを行う。

実技テスト成績で評価する。

また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『イタリア歌曲集第1巻、第2巻』（全音楽譜出版）

『ベリーニ、トスティ歌曲集』（全音楽譜出版）

『にほんの歌 111』（ONKYO-SHA 版）等、および各自で適宜選択した曲集

[5] 参考図書

授業の過程で状況に応じて、CD、DVD等の演奏例を紹介、演奏の参考として鑑賞する。

合奏 I		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功 治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

管弦合奏の基本的な楽曲を教材として取り上げ、楽曲の成り立ち、構成等を学ぶ。同時に独奏等の学習では、得ることの出来ないアンサンブルの魅力に触れ、合奏の重要性についても学ぶ。

[2] 授業の計画

知名度の高い曲で学生が良く聞き、楽しめる教材を取り上げ、下記の点に特に留意しながら学習する。

1. 管・弦・打等それぞれのパート別の学習を行い、楽曲の部分としての「パート」の重要性を確認する。
2. パートの役割を十分に確認する。
3. 正確な音程、リズムの学習を行う。
4. 楽曲にふさわしいボーイング、ブレス等について学習する。
5. 管・弦・打等の音量バランス等について確認する。
6. 指揮者とのコミュニケーションを大切に演奏を行う。
7. 楽曲や作曲家の音楽史的背景について学習する。
8. CD, VTR等を利用して実際の演奏を視聴し、演奏の全体像を確認していく。

[3] 評価の方法

管・弦・打等それぞれのパートの演奏技能を評価する。
合奏の為、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

学生の能力に合わせた楽曲を適時プリントして配布する。

合奏Ⅱ		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功 治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

管弦合奏の基本的な楽曲を教材として取り上げ、楽曲の成り立ち、構成等を学ぶ。同時に独奏等の学習では、得ることの出来ないアンサンブルの魅力に触れ、合奏の重要性についても学ぶ。又、発表会や演奏会も企画、その演奏をもってオーケストラでのマナーや取り決め、手順などを指導していく。

[2] 授業の計画

合奏Ⅰで学習したバロック時代、古典派前期の楽曲に加え、古典派中期・後期、一部ロマン派の楽曲を教材として取り上げ、さらに豊かな音楽体験を行う。また、授業の最終日には発表会を行う。留意点については下記の通りである。

1. 管・弦・打等それぞれのパート別の学習を行い、楽曲の部分としての「パート」の重要性を確認する。
2. パートの役割を十分に確認する。
3. 正確な音程、リズムの学習を行う。
4. 楽曲にふさわしいボーイング、ブレス等について学習する。
5. 管・弦・打等の音量バランス等について確認する。
6. 指揮者とのコミュニケーションを大切に演奏を行う。
7. 楽曲や作曲家の音楽史的背景について学習する。
8. CD, VTR等を利用して実際の演奏を視聴し、演奏の全体像を確認していく。

[3] 評価の方法

管・弦・打等それぞれのパートの演奏技能を評価する。
合奏の為、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

学生の能力に合わせた楽曲を適時プリントして配布する。

音楽社会活動実践		担当教員	おおくぼ こうじ 他 大久保 功 治 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1・2 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

この科目の学習のねらいは、専門分野で学んだ技能と知識を生かし、学生の一人ひとりが、演奏や演奏スタッフまたは福祉現場に於けるボランティアなどへの参加等、地域社会と深くかかわる機会を積極的かつ主体的に取得して、社会の文化と発展に貢献する喜びを、実際の社会活動の現場を通して体験することにある。

[2] 授業の計画

- (1) A, B, C の 3 分野に渡って活動することが望ましいが、コース別に、下表を原則として 2 つの分野以上に渡ること。

コース	A (演奏出演)	B (演奏スタッフ)	C (ボランティア)
演奏	○	○	※1
音楽療法	※2	○	○
デジタル音楽創作	○	○	※1

※1 演奏、デジタル音楽創作コースに於いては、福祉関連での演奏活動は C 分野とみなす。

※2 音楽療法コースに於いては、福祉関連での演奏活動は A 分野とみなす。

- (2) A, B, C 各分野に渡って活動の回数は、下表を原則としてカウントする。

A	演奏出演	1 回(1 日以内)のコンサート出演	1 回
B	演奏スタッフ	1 回(1 日以内)のコンサートやイベントでの活動	1 回
C	ボランティア	1 回(1 日以内)のボランティア活動	1 回

- (3) 活動後 1 週間以内に「音楽社会活動実践」履修ノートに記入・記録し、資料と共に学科長に提出して認印を受けること。(夏期、冬期等休暇中の活動報告は休暇明け 1 週間以内に提出)

- (4) A, B, C 共、活動を証明する資料提出が困難な場合は、所定の用紙に活動先責任者の証明をもらうこと。

[3] 評価の方法

2 カ年に渡って上記 A, B, C の 3 分野での活動合計が、10 回以上をもって単位を認定する。

[4] その他

入学時に手渡された、「音楽社会活動実践」履修ノートを引き続き活用すること。

卒業研究		担当教員	おおくぼ こうじ 他 大久保 功 治 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	必修

[1] 授業のねらい

<演奏コース>

「主科実技 I～IV」で学習した演奏表現の集大成として好適な楽曲を選定し、音楽的に深く掘り下げる内容の学習を積み上げ、公開の場でそのしめくくりとしての演奏発表を以って、二ヶ年の自己練磨の成果を披露するものである。

<療法コース>

高齢者領域、障害児領域において行ってきたセッションについて卒業論文を各自作成する。またその内容について研究発表を行い、将来、学会などで発表を行う際の方法についても演習する機会とする。

<デジタル音楽創作コース>

デジタルパフォーマンス I～IVと音響基礎・演習で習得したコンピュータミュージックの知識と音楽制作のノウハウ・音楽表現の集大成として、自由曲の制作を行い、CD制作または学内においての楽曲発表をもって、二ヶ年の成果を披露する。

[2] 授業の計画

<演奏コース>

- 1) 二ヶ年の学習を通して到達した学生個々の学習課程と音楽的過程に応じて、上記のねらいに好適の楽曲を1～2曲選びだす。
- 2) 在学中に学んだ音楽理論、和声学、楽式論、音楽史等の楽理や音楽知識を土台として作曲家の意図する音楽的な意味を楽譜から読みとり、それを再現するための演奏テクニックを練磨する。
- 3) 楽曲について十分な研究を積み上げ、用意周到なる準備を以って、品位とセンスある演奏マナーを身に付け公開演奏会を行う。

<療法コース>

- 1) 高齢者領域、又は障害児領域のいずれの内容で論文を作成するかは、1年次から心積もりをして準備し、それを土台に量的研究か質的研究かなどの研究方法について決定する。
- 2) 研究内容の裏付けとなる理論についての学習を深め、客観的で説得力のある学術論文になるよう、記述・表現法も演習する。
- 3) 研究発表を行うための技術、方法について、要旨の作成方法なども含め演習する。
- 4) 卒業論文集を作成する。

<デジタル音楽創作コース>

- 1) 自由曲(オリジナルまたは編曲)の楽曲制作の方向性を決める。
- 2) 在学中に学んだ DTM(DAW)、レコーディング・編集の知識に加え、和声や合奏などの授業から習得した音楽表現をフルに活用し、楽曲を実際にコンピュータ上で表現するために創意工夫を凝らす。
- 3) 各自の希望によって、演奏コースの学生に演奏を依頼して生演奏をレコーディングして曲にはめ込んだり、映像を用いて音楽表現を脚色するなど、あらゆる表現手段を模索する。
- 4) 発表のためのメディア(CDなど)を作成、卒業発表

[3] 評価の方法

<演奏コース>

当該楽曲に関しての最終実技テストの結果に、卒業演奏会当日の成果を加味して、総合的に評価する。

評価配分 実技テスト 80%、当日成果 20%

<療法コース>

研究発表および卒業論文の内容を総合的に評価する。

評価配分 論文発表 20%、論文内容 80%

<デジタル音楽創作コース>

最終的に仕上がった楽曲のクオリティ、内容を総合的に評価する。

評価配分 楽曲の内容 50%、楽曲のクオリティ 30%、音楽表現技術力 20%

[4] 教 材

<療法コース>

貫 行子・星野悦子共著『音楽療法研究と論文のまとめ方』（音楽之友社 2002）

<デジタル音楽創作コース>

これまでの授業で使用したテキスト、配布プリントン資料など

[5] 参考図書

<演奏コース>

選定した楽曲に関してその複数の演奏例や関連曲の紹介、又、作曲家伝等の研究書などは学習過程の適切な時期に、その都度紹介する。

<療法コース>

音楽心理学音楽療法研究年報 日本音楽心理学音楽療法懇話会

<デジタル音楽創作コース>

サウンド・アンド・レコーディング・マガジン / リットーミュージック *図書館で閲覧可

DTM マガジン/寺島情報企画 *図書館で閲覧可